やまざと

会報１３号（２０００夏号）

行事お知らせ

✳花・星・人in南竜　８月５日（土）６日（日）白山南竜ケビン

✳秋の山小屋酒場　９月下旬

事務局へお問い合わせ、またはワンゲルＨＰをご覧下さい。

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会

目　　次

＊表紙 …… 21期　竹中　敏
＊会報「やまざと」によせて …… 会長15期　奥名　正啓　1

海外特集
＊海外トレッキングの魅力について－超・私的放浪記 …… 29期　深井　嘉浩　2
＊カラコルムの旅より …… 11期　長岡　正利　9
＊熱い大地の想い出話ＰａｒｔⅡ …… 33期　佐藤かおり　16
＊シェルパのふるさとを訪ねて …… 15期　舟田　節子　24

ミレニアム行事報告
＊Ｍ１　ＯＢスキー合宿ｉｎ野沢 …… メールから　44
＊Ｍ２　お花見コンパ顛末の記 …… 15期byせっちゃん　56
ｎＭ３　山小屋酒場
高三郎と犀川ダム …… 18期　椿川　利弘　58
現役バイト一言 …… 59
春の山小屋酒場 …… 15期　舟田　節子　60
2000年春山小屋酒場 …… 13期　辰野　隆義　64
山小屋酒場沿革史 …… 67
＊野猿天国複数に分裂？（新聞記事より） …… 68
＊ちょっと久しぶりの白山 …… 20期　深田　進　69
＊山便り（僧ケ岳） …… 10期　木津　治男　73
＊山便り（尾瀬） …… 11期　青柳　健二　74
＊山便り（猿山） …… 15期　奥名　正啓　76
＊ＯＢ一言通信 …… 77
＊メール通信 …… 79
＊鈍行列車で思ったこと　他３編 …… ０期　田村　昭夫　86
＊石川県のキノコ－自然環境とキノコ相－（転載） …… 19期　栂　典雅　89
＊古九谷のこころを今に（北国新聞「舞台」から） …… 20期　中村　元風　93
＊現役情報 …… 前田顧問　現役　94
＊新聞切り抜き情報 …… 97
＊ＯＢ名簿について　住所録記載変更者 …… 103
＊会計報告 …… 106

ブナの林の中でのんびりとコーヒーを飲んでいたら、むこうで、変なにおいの正体を確かめようと、テンが立ち上がってあたりをうかがっていました。

コーヒーを飲んでいた人はあまりに気持ちがよく、ぼおっとしていたので、テンに気付きませんでした。

でも、見た人はいなかったので、ほんとうにテンがいたかどうかはだれも知りませんでした。

21期　竹中　敏

会報「やまざと」によせて

ＯＢ会会長　15期　奥名　正啓

ＯＢの皆様いかがお過ごしでしょうか。

最後の未知の分野、ヒトの遺伝子の解明が進み、もうじきその全容が明らかになると言われています。これまで不治の病とされてきた難病が克服できたり、将来かかりそうな可能性の大きい病気なども予見できる。そうなると、自分は４０才を過ぎると体質がこんな風に変わって、こんな病気になりやすいといったことが分かってくる。喜ばしいことかどうか甚だ疑問である。ある男が結婚しようとしている女性の家を訪ねたところ、その母親がそっくりの顔立ちをしていたので将来の彼女を見てしまったようで、少なからず落胆してしまった。先が見えるのは決していいことばかりではない。「知りすぎたのね」とはならない方が人生はおもしろい。恐竜がその図体の大きさ故に滅びたように、人類もその頭脳の発達故に滅びかねない。地球が誕生して５０億年、生命が誕生して４５億年、誕生した生命は５０億種類、現存する生物は５００万種類、実に９９．９％は絶滅してしまった。その一つにヒトが入っても決して不思議ではないが、我々の英知を結集し節度を持って臨めば免れることができるに違いない。同じように我らが山小屋ベルクハイムも、現役の諸君と我々ＯＢの力でいつまでも残しておこうではありませんか。

北海道の有珠山がまたもや噴火活動を活発化させ、付近の住民を不安に陥れ被害も甚大のようです。本当に気の毒なことだ思いながらも、新しく山ができるその活力、躍動感には目を見張るものがあり、一種の生命の誕生のような感動すら覚える。白山は水に削られ、砂防工事もむなしく莫大な土砂を流し続けて壊れていく一方である。片方で山が生まれ、一方で山がなくなっていくのは自然なことであって、ヒトが望むように残すのはむしろ不自然と言うべきかもしれない。

さて、今年は西暦２０００年を記念して（そんな義理はないのだが・・）野沢でのスキー合宿も例年になく参加者が多く、出来事もいろいろありました。沈床園でのお花見コンパは、桜の開花がいつもより１週間ほどおくれてちょうど満開の日にあたりました。物事はすべてがうまくいくはずもなく、昼前まではなんとか曇り空が雨をささえていましたが、いよいよという時になって支えきれず、本格的な雨となってしまいました。そんな中で２組の宴会が春雨に煙り、白い光のライトアップを受けた石川門とサクラを眺めつつほろ酔い加減で、遙か昔ワンゲルにはいった頃を思い浮かべていました。
ベルクハイムは床の傷みが激しく、全面張り替えることにしました。舟と現役を利用して資材や工具など運搬し修復作業を始めました。春は山菜取りの人が多くそして釣りに入ってくる人も多くちょっとした賑やかさを感じます。秋には継続作業だけでなく、囲炉裏を復活させようかとたくらんでおりますので、皆様のご協力をお願いします。秋は、ゆっくりとした時の流れを感じさせて、すてきな安らぎという報酬も与えてくれます。

８月には白山南竜への集中を計画しています。日頃の生活習慣からはなかなか抜け出せるものではありません。しかしながら、普段の通勤の帰り道を少し変えただけで別の世界へ迷い込んだような新鮮さを感じることもあります。そんな気持ちでふと白山にでも出かけてみませんか。南竜で忘れかけていたあの人に会えるかもしれません。

海外トレッキングの魅力について
―超・私的放浪記―

29期：深井 嘉浩

以前、『やまざと』誌上で“アジア放浪・帰国報告”をさせていただきましたが、今回はＯＢ会舟田様より“海外トレッキング”に関する執筆の機会を頂きましたので、僭越ながら駄文にまとめてみました。ご興味のある方は是非ご一読下さい。

●1984/04～1989/03：金沢大学ワンダーフォーゲル部在籍

在学中の記憶は、何故か「ワンゲル活動とバイトと酒宴」のみ。おかげで当時ワンゲルの主流であった「留年（ためどし）会」の一員となり、その後の人生の歯車が狂い始める。

●1988/03～1988/06：ユーラシア放浪ＰＡＲＴⅠ

大学５年を迎える春、エベレストを見たくてチベットを目指す。バイト代（総額２０万円）を手に、神戸より「鑑真号」片道切符（当時２万円）で上海に上陸。生まれて初めての海外に戸惑いながらも、今にして思えば結構ディープな辺境地（雲南・四川省の山岳地帯）を寄り道。日本を出て３ヶ月後、ようやくチベット高原・定日（ティンリ）で、地平線の彼方の“チョモランマ”に対面（あの時の感激は今思い出しても胸が熱くなります）。その後、バスとヒッチ･ハイクでヒマラヤを越え、あこがれの都カトマンズへ。

しかし、ネパール側は既にモンスーン（雨季）を迎えており、また資金も底を尽きたため、ヒマラヤ・トレッキングに未練を残しながらも、カトマンズよりバンコク経由で帰国。金沢で“赤痢（の疑い）騒動”を起こし、当時の現役部員の皆さんには大変ご迷惑をお掛けいたしました。

●1989/04～1996/05：ＪＴＢ日本交通公社勤務

団体旅行営業のため、担当ツアーは主に“温泉宴会旅行”が中心であったが、時にはアメリカ・ヨーロッパなど“おしゃれな海外”へのグループ･ツアーも手掛け、世界各地で貴重な経験を得る。７年後退社。転職して、しばらく“２度目の放浪”に向けての資金稼ぎに精を出す。

●1996/12～1997/07：ユーラシア放浪ＰＡＲＴⅡ

「タイ航空」片道切符で、懐かしのバンコク・カオサンロードへ。今回の放浪もルート・帰国日は未定。当初は『深夜特急』（あるいは“猿岩石”）みたいに、ユーラシアを横断してヨーロッパを目指すつもりで出発する。まずは、タイ南部の“楽園”ピピ島（今は『ビーチ』撮影で有名になってしまったが）で、サラリーマン・モードからバックパッカー・モードに頭を切り替えた後、念願の“ヒマラヤ・トレッキング”実現のため、カトマンズへ渡る。

数日間の準備の後、現地ガイド一名と共にルクラへ飛び、「どうせ行くならエベレスト直下まで」と欲を出し“カラパタール”へと歩き出す。周囲をタムセルク、アマダブラムといったヒマラヤの巨峰群に圧倒されるエベレスト街道を、ナムチェ、タンボチェと進む。途中高山病で「頭が爆発しそうな痛み」にのた打ち回ったりしながらも、９日目にカラパタール(5545m)へ到達。宇宙みたいな濃紺の空の下、目の前に聳える世界最高峰と対峙した時、「あぁ、生きてて良かった、会社辞めて旅に出て良かった（帰国後、結構後悔することになるのだが…）」と、溢れる涙を止めることのできない感動を体験してしまう。

これがきっかけで“ヒマラヤ”にはまり、１５日間のトレッキングを終えてカトマンズへ戻ると間もなくポカラへ移動。“アンナプルナ内院＆ジョムソン街道”を、聖地ムクチナートまで２１日間ぶっ通しで歩き続ける。内院（アンナプルナＢＣ.4000m）では周囲を取りまくヒマラヤ核心部のパノラマ、アンナプルナ山群南麓では聖峰マチャプチャレからダウラギリへと連なる山岳展望、そして北麓ではチベット的な荒涼とした世界。日々様変わりしていく風景と、そこに生きるヒマラ

ヤの民の日常が非常に印象的な旅であった。

その後、３ヶ月かけてインドを放浪。途中パキスタン国境に近いラジャスタン地方・ジャイサルメールの砂漠では、ラクダを借りて２泊３日の“キャメル・サファリ”も体験。後半はガンジス河を遡り、インド・ガルワール・ヒマラヤ最高峰“ナンダデビィ”山域へも足を延ばす。４月はまだ残雪も多く最源流まで到達できなかったものの、このエリアはヒンドゥー教最高の聖地のため“サドゥー（修行聖者）”との出会いなど、なかなか怪しい体験もあり、この頃には「自分が日本人である」という自覚がすっかり希薄になっていた。

ニューデリーの大使館でパキスタンとイランのビザを取得（トルコから西はビザ不要）。「Go Go West！ にんにきにきにき…（『西遊記』のテーマ知ってますか？）」と、気合を入れてヨーロッパへ向けて西進を再開するが、軽い気持ちで立ち寄った北パキスタンで、再び足は止まってしまう。

せっかく来たからにはと、山岳ガイドと交渉し、“ナンガパルバット”南面ベースキャンプまで行ったのだが、ＢＣから見上げる落差 5000m（！）の南壁と、横たわるルパル氷河の迫力にまたもや魅了される。更に、フンザからパスーにかけてのカラコルム・ハイウェイ周辺では、ラカポシ、ディラン、シスパーレを筆頭とする 7000m級の峰々が、ネパール・ヒマラヤをも凌駕する荒削りな山岳風景を展開させていたのである。

「こうなったらカラコルムの核心部・Ｋ２まで踏み込まねば後悔する」と、インドの古本屋で入手していた英文ガイドブックでコース研究の上、山岳ガイドに相談する。しかし“Ｋ２”は、総延長 50Km のバルトロ氷河の最奥“コンコルディア(4600m)”まで行かねば、その姿を見ることができず、往復に１５日を要する。しかも村々の点在するネパール・トレックとは異なり、全くの無人地帯を歩くため、全ての食料・燃料・テント等を、遠征さながらのキャラバン隊で運ばなければならないと言う。従って自分の乏しい資金では無理だと判り、後ろ髪引かれる思いで断念。気持ちを切り替えて次の国イランへ進むことに決めた。。

ところが、スカルドの安宿で同宿したドイツ＆オーストリアの女性二人組み（しかも若い！）にこの話をすると、彼女達もＫ２へ行ってみたいと意気投合。更にこの夜、イギリス人のパーティーが正にＫ２・トレックを終えて我々の宿に戻って来た。しかもバルトロからゴンドコロ・パス(5600m)を越え、フーシェ谷を回って下山したらしい。興奮してガイドのＭｒ.バシールに相談を持ち掛けると、「５人以上集まれば、君達の予算でもう一度行ってもいい」と言う。話は盛り上がり、この日から“同志集め”に奔走、スカルドの各安宿に「英文＆日本語の募集ポスター」を貼り、また街で見かけたバック・パッカーには片っ端から声を掛けて回った。数日のうちにドイツ人青年一名とオランダ人カップル一組が加わり、まるで“ブレーメンの音楽隊”みたいに６名の国際パーティーが結成された。パーミッション（入山許可証）の取得や、バザールでの食料・装備調達などで、計２週間近くの日数を費やした後、遂に出発の日を迎える。

ガイド以下、ポーター、コックそして我々６名を含め、総勢３０名の大キャラバンは、“即席パーティー”のため、当初は揉め事の連続であった。ガイドＶＳポーター、そしてメンバーＶＳメンバー（ヨーロッパ人は本当に自己主張が強い）。わずか数日にして既に分裂の危機を迎えていたが、その度に仲裁に回る。自分も相当に我の強い方であるが、それでも彼らよりははるかに「和と協調性（日本人の美徳か？）」を持ち合わせていたようで、いつしか「添乗員」になってしまう。

さてコースの方は、氷河歩きとは言っても堆積した岩石に覆われているため、ピッケル・アイゼンは不要である。（今回は復路ゴンドコロ・パスという一般的でないルートをとるため、峠越え用に中古のピッケルを現地で入手したが。）しかし、クレバスが多く、時には０℃の水流を渡渉した

りと、ガイドが居なければルート・ファインディングは困難である。また、バルトロ両岸に次々と現れるパイユ、トランゴ・タワー、ムスターグ・タワーといった岩峰群は、どれも“怪峰”と呼ぶにふさわしい迫力で、地球創世期の風景（見たことないけど）に居るような感覚である。

出発８日目、コンコルディアに到着。バルトロ氷河はここで、正面に立ちはだかるガッシャブルムⅣにより左右に二分される。北側“ゴッドウィンオースティン氷河”の奥にブロード・ピークと、巨大なピラミッド・Ｋ２を臨む。神秘性と威厳を兼ね備えたその存在感に、強い衝撃を受ける。

翌日、Ｋ２のＢＣまで往復、日本隊・スペイン隊のベースでお茶などをご馳走になる。（この一ヶ月後、日本隊はＫ２西壁ルートの初登頂に成功。）その後、我々は進路を南に取り“ビグネ氷河”を遡って行く。いよいよ最難関“ゴンドコロ・パス”へ向けて。

午前２時起床、満点の星空のもと、氷河の最源頭を詰める。徐々に傾斜が増し、クラストした雪面をピッケルでカッティングしながら登る。斜面の途中で「超人ラインホルト・メスナー」に遭遇。感激の余り、鼻水垂らしながら抱きつくと、とっても迷惑そうであったが。やがて高度は5,000mを越え、足取りは重い。しかし、既に“カラパタール”を経験していたためか、高山病の兆候は無い。夜が明ける頃、突然前方の視界が開ける。“ゴンドコロ・パス”だ！ 振り返ると、朝日を浴びて真紅に染まったＫ２、ブロード・ピーク、ガッシャブルムⅣ・Ⅲ・Ⅱ・Ⅰが、視界へ飛び込んできた(なんと、8,000m峰４座が一挙に！)。第三の極地・カラコルムの全貌――想像を絶する光景である。かつて、立花隆の『宇宙からの帰還』で読んだ「宇宙空間から地球を眺めた時の飛行士の感覚」が、なんだか身近に感じられ、ナチュラル・トリップへと導かれて行く…。やがて、メンバー、ポーターの全員が無事に到着。数日前までのぎくしゃくした人間関係はもはや過去のものとなり、一人一人と固く抱き合ってお互いの“偉業”を祝福しあう。言葉なんて要らない。極限の地での達成感が、我々を一つに結び付けていた。

しばし“至福の時”を満喫した後、フーシェ側ゴンドコロ氷河への下降を開始する。峠から覗きこむと、高度差1,000m近くも垂直に切れ落ちた雪壁だ。たった一本のザイルを何度もフィックスしながら、慎重に下る。幸いにも快晴のコンディションで雪が適度に緩み、ステップは確実であったが、条件次第ではアイゼンのみならず、各種登攀具が必携のルートであろう。数時間の緊張の後、雪と氷の世界から解放される。我々を待ち受けてくれた６月下旬のフーシェ谷は、色とりどりの高山植物が咲く“シャングリラ＝桃源郷”の世界であった。

１５日間のトレックを終え、久しぶりにスカルドへ帰り着くと、我々“Ｋ２・ゴンドコロ国際パーティー１９９７（自称）”は解散した。各々が西へ東へ、再び“バック・パッカー”に戻るために。翌朝、宿を出る時ガイドとメンバーの皆が見送ってくれた。“SEE YOU AGAIN！いつか、またどこかで”。この長い旅の途中で、いくつもの“出会い”と“別れ”を経験してきたが、こんなにもつらい瞬間はなかった。乾いたスカルドの街が涙で霞んで見えなくなっても、バスの窓からずっとずっと手を振り続けた…。

さて、イスラマバードへ戻った時点で、残金は $500 を切っていた。もう旅は続けられない。旅の潮時を既に迎えていた。「日本へ帰ろう。」街の旅行エージェントを回ると、日本までの航空券はどんなに安くても $700 はすると言う。大ピンチ！ しかし名案が浮かぶ。「まだ、陸路がある！」

中国ビザを速攻で取得すると、再びバスでカラコルム・ハイウェイの北上を開始。ギルギット、フンザと連日バスを乗り継ぎ、やがてフンジェラブ峠を越え中国側のパミール高原へ。途中カラクリ湖では、あまりの美しさに思わずバスを乗り捨てる。コングール、ムスターグ・アタ両峰に囲まれた草原地帯は、カザフ族の遊牧民が羊を追う季節を迎えており、夢の中に居るような光景であっ

た。翌日、通過しようとするバスを必死に追って捕まえ、カシュガルへ。バザールに集う“青い目のエキゾチックな美女達”に心を奪われつつも、数日後ホータンへ移動。ここから、タクラマカン砂漠の中央を南北に縦断する新ルートを、２泊３日のバスの旅。座席の代わりに狭い２段ベッドが何台も並ぶ妙なバスで、ずっと横になってなければならない。食事とトイレ休憩（と言ってもトイレなどないが、）以外は、とにかく４０時間余りひた走り、ときおり顔を上げて車窓を眺めるのだが、見えるのは一面の砂漠のみであった。シルクロード最大の街ウルムチに着くと、今度は列車の切符を手配。学生時代の「地獄の硬座（２等座席）上海～昆明４日間」の忌まわしい想い出が、ふと頭をよぎり、なけなしの金で「硬臥（２等寝台）」チケットを奮発する。車中では、またもや中国人民の筆談攻めに遭いながらも、酒や弁当まで恵んでくれる“国際友好的好意”に甘えつつ快適な４日間を過ごし、一気に上海へ到着。

９年前、生まれて初めての海外で、最初に泊まった安宿「浦江飯店」へ再び転がり込む。長旅の疲れで放心状態のまま、宿の前を流れる黄浦江をぼんやり見つめていると、９年前の旅から、日本でのサラリーマン生活、そして今回の放浪へと、全てがここで一筆書きで繋がっているような、そんな気妙な感覚を味わう。

遂に資金は底をつきていたが、なんとか“裏技？”で「鑑真号」に乗船。桟橋から出港する瞬間、８ヶ月に及ぶ“ユーラシア大陸”への別れを実感し、感傷的になる。３日後神戸に接岸。久し振りの日本に戸惑いながら、考えたことは「明日から何して生きて行こう？」であった。

●1997/08～1998/03：社会復帰への道

すっかりネジの抜けてしまった状態で、帰国直後の会話はやたら“宇宙”とか“輪廻転生”などの単語が多く、「インド帰り＝やばい人」の図式にみごとにはまり、回りの友人は思いっきり引いてしまう。約１ヶ月程の“リハビリ期間”を要した後、日本社会への復帰活動を開始。“縁”とは誠にありがたいもので、名古屋市内の旅行代理店を紹介されて半年間お世話になる。また、この間の“飛び込み就職活動”で、春からアルパインツアー東京本社への再就職も決まった。

●1998/04～今のところ：アルパインツアーサービス勤務

「業界経験＋ヒマラヤ放浪＝アルパイン」という極めて安直な発想で入社。３２歳を迎えての転職、初めての東京生活、そして“くせもの”揃いの職場（社風はモロ体育会系山岳部！）。様々なストレスを感じながらも、波瀾に富んだ展開を「人生、旅の連続」と開き直ることに決め込む。

さて仕事の内容であるが、“世界の山旅・辺境の旅”をテーマとする旅行会社なだけに、営業の傍ら、世界各地の山岳地帯へ“ツアー・リーダー”（ここでは決して“添乗員”とは呼ばない）として赴いている。この２年間で、得意のネパール・ヒマラヤを皮切りに、ヨーロッパ･アルプス、カナディアン・ロッキー、ニュージーランドなどへの“トレッキング・ツアー”及び、アフリカ最高峰キリマンジャロ、ボルネオ島キナバル山、台湾玉山・雪山などの“登頂トレッキング”へ同行した。この年末に、念願の地元・名古屋営業所へ転勤。今夏は、南米・アンデスなどでツアー・リーダーを務める予定である。

こうやってコースを羅列すると、なんだかすごい登山技術を必要とするように思われるかもしれない。確かに“登頂ツアー”の一部（モンブランなど）で、ピッケル･アイゼン技術、及び現地ガイドとのアンザイレン登行を必要とするものもあるが、ほとんどは“ワンゲル出身者”であれば体験できるコースである。優れた登攀技術を要求される“エキスペディション（遠征登山）”とは異なり、“トレッキング”において必要とされるのは「体力」の他は、次の２点であろう。

まず第一点は、「辺境地への適応力」だが、これはワンゲル出身者には全く問題無いでしょう（笑）。

そして第二は、キリマンジャロやヒマラヤ高所（特に4,000m以上）での「高所順応力」である。しかし「高所順応力」は経験と体質・体調に負うところが大きく、また日常トレーニングが可能なものでもない（日本では富士登山くらいか）。必要なことは、とにかくゆっくり歩く、水分を多く取る、一日の登行高度を抑えるといった、基本的な「高山病の予防知識」の修得と厳守です。高山病は非常に危険な問題であり、実際に自分も取り返しのつかない事故に遭遇してますので、特に初めて高所に赴く場合は、肝に銘じておいて下さい。

以上、極めて個人的な経験をもとに「海外トレッキング」について書いてきましたが、興味をお持ち頂き「昔取った杵柄」を奮い起こすきっかけとなれば幸いです。私の場合は「会社辞めて放浪」と言う特殊なケースですが、今は「休暇でヒマラヤ・トレッキング」も充分可能な時代です。先日は、３３歳の現役銀行員（熱田 渉氏）が「世界７大陸最高峰登頂」なんて言う衝撃的なニュースまで耳にしています。もちろん、それぞれ職場の事情など、取り巻く環境は千差万別でしょうが、是非とも世界の高峰と対峙して「人生観に影響する程のインパクト」を体験してみて下さい。

最後に【ＣＭ】となりますが、私が勤務しております「アルパインツアーサービス㈱」の業務を紹介させていただきます。ＯＢ、現役の皆さんに、情報提供などお役に立てることがあればご協力させて頂きますので、宜しくお願いいたします。

【ツアー内容】海外・国内トレッキングのパッケージツアー（カタログに掲載）
海外トレッキングの個人手配・グループツアー手配
ヤマケイ登山教室など「山と渓谷社」タイアップ・ツアー

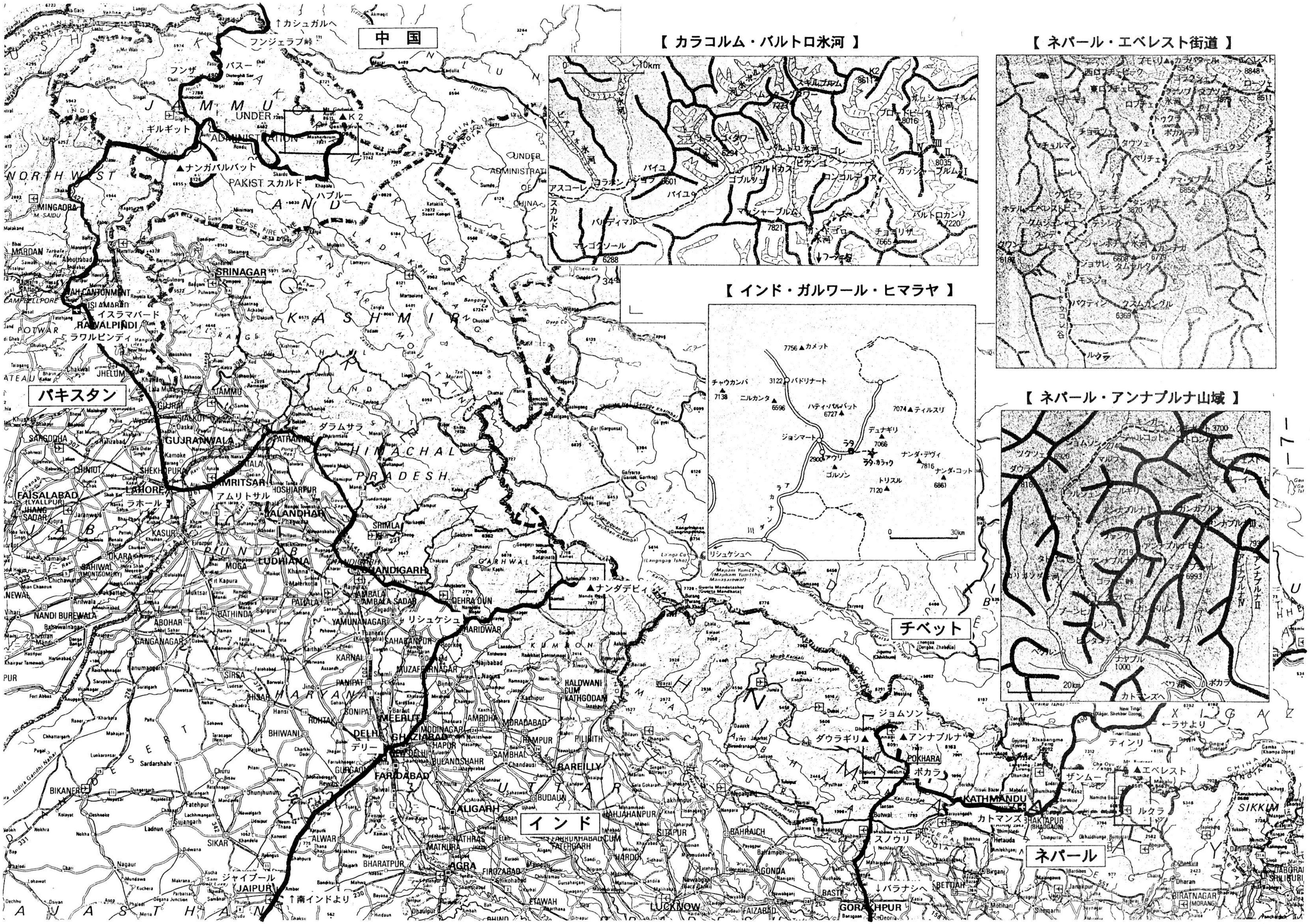
【 カタログ 】『世界の山旅・辺境の旅』＝夏版（３月発行）・冬版（９月発行）の２分冊。
ヨーロッパ･アルプス、カナディアン･ロッキー、カラコルム、アンデス　→夏版
ネパール･ヒマラヤ、インド･ヒマラヤ、ニュージーランド、パタゴニア　→冬版
キリマンジャロ、ボルネオ、台湾、中国・チベット、日本の山旅 etc.　→通年

【 説 明 会 】現地で撮影したスライドやビデオを上映、トレッキングコース＆ノウハウを解説。
特にカタログ発行時（３月・９月）は、全国各地で「地方説明会」も開催。
私も中部地区(東海・北陸)を担当しますので、ご興味のある方是非お越し下さい。

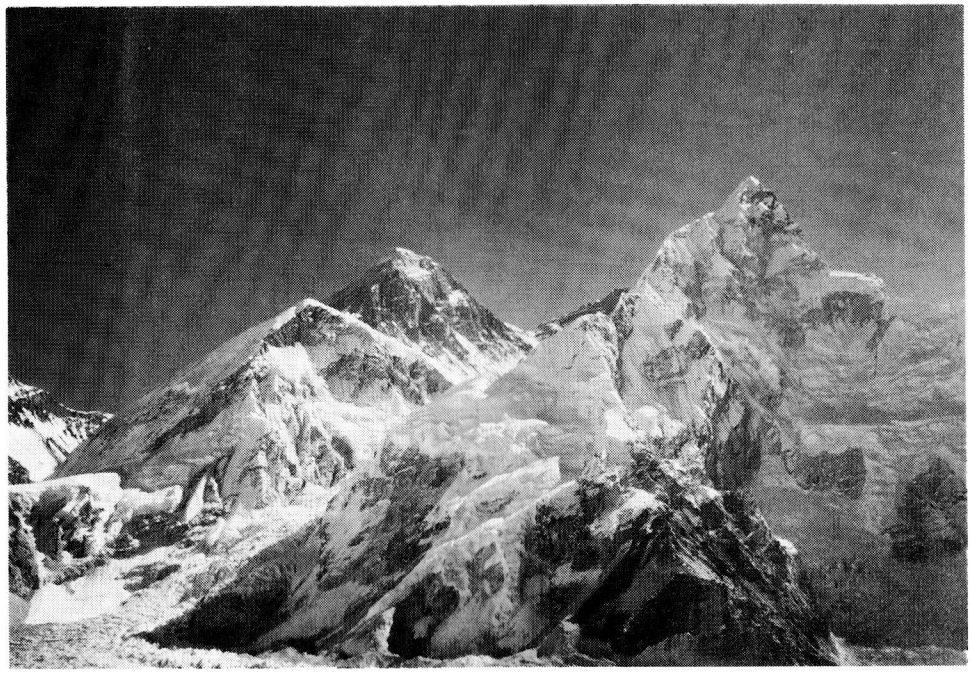
【 問合せ／資料・カタログ請求 】
アルパインツアーサービス株式会社 名古屋営業所　　深井 嘉浩〔ＫＵＷＶ２９期〕
住所：〒450-0002 名古屋市中村区名駅 3-23-6 第２千福ビル８階
TEL：０５２－５８１－３２１１　FAX：０５２－５６１－８３３８

追伸：東京勤務の折に、１１期・長岡さん、１５期・南保さんにお会いする機会がありました。これも「やまざと」掲載がご縁と、この場を借りてお礼申し上げます。

また、放浪帰国後は一文無しで、しばらく山にも行けない状況でしたが、最近は２７期・竹内さん（福井山岳会所属。３３期・西村さんも同会員）とロッククライミング〔北岳バットレスⅣ尾根〕や山スキー〔白馬蓮華、取立山〕に同行させて頂いたり、３０期・大村君（何故か今も近所）とは北八ヶ岳宴会山行＆クロカン･スキー（初体験）に行って参りました。山から遠ざかってる皆さんも、たまには仕事忘れて遊びませんか？



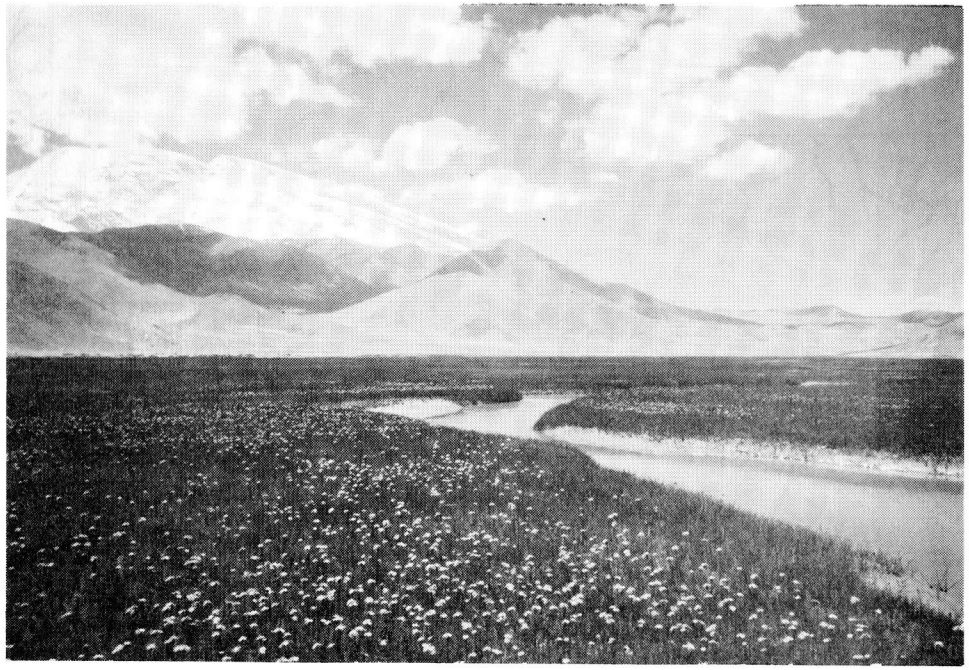
中国
パキスタン
インド
チベット
ネパール
【カラコルム・バルトロ氷河】
【ネパール・エベレスト街道】
【インド・ガルワール・ヒマラヤ】
【ネパール・アンナプルナ山域】
↑カシュガルへ
フンジェラブ峠
フンザ
パスー
ギルギット
▲K2
▲ナンガパルバット
スカルド
ハプルー
イスラマバード
ラワルピンディ
ラホール
アムリトサル
ダラムサラ
リシュケシュ
▲ナンダデビィ
デリー
ジャイプール
↑南インドより
↓バラナシへ
スノウリ
ジョムソン
ダウラギリ▲
▲アンナプルナ
ポカラ
カトマンズ
ザンムー
▲エベレスト
ルクラ
ティンリ
←ラサより
7756▲カメット
チャウカンバ
7138
3122 バドリナート
ニルカンタ
6596
ハティ・パルバット
6727
7074▲ティルスリ
ジョシマート
デュナギリ
7066
ナンダ・デヴィ
7816
ナンダ・コット
6861
トリスル
7120
ゴルソン
2900 アウリ
リシュケシュへ
SRINAGAR
RAWALPINDI
LAHORE
AMRITSAR
DELHI
JAIPUR
AGRA
LUCKNOW
GORAKHPUR
POKHARA
KATHMANDU
SIKKIM



【 カラパタール(5545m)より エベレスト(中)とヌプツェ(右) 】

【 アンナプルナ内院・ＢＣ付近(4000m)は 周囲全てが「ヒマラヤ」】

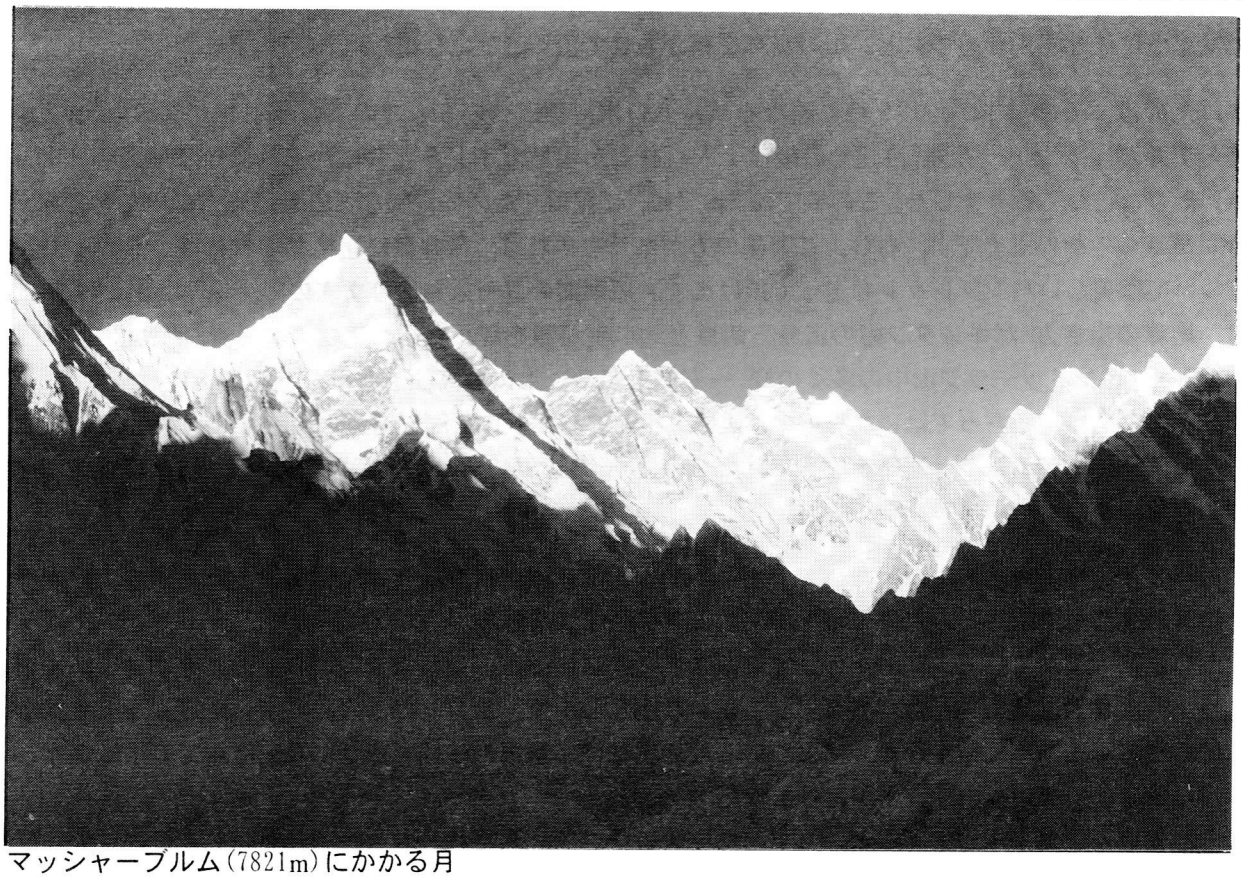
【 ゴンドコロ･パス(5600m)より Ｋ２(中)とブロード･ピーク(右) 】



【 ７月のパミール高原ムスターグ･アタ山麓は一面の花、夢の世界 】

カラコルムへの旅より ―― 次ページ記述の山歩きにつき，写真で紹介させて頂きます。

11期OB 長岡正利



マッシャーブルム(7821m)にかかる月
日が差し始めるまでは氷点下の世界。バルトロ氷河コンコルディア(標高4650m)より望見。

雲湧きはじめたマッシャーブルム　上写真の右方の谷間から見上げたもの。この辺りでの，谷との比高は約3000mだが，地形の規模が大きいために，覆いかぶさるように聳える山々もさほどには見えません。

この原稿をまとめつつ，ふと気がつけばカラコルムに出発したのがちょうど１年前のことでした。職を辞して後，１ヶ月間余をかけて，長年の憧れであったパキスタン北部を歩いて参りました。

今回，「やまざと」誌の海外特集とのことで，一時はなにがしかの紀行的文をとは思ったものの，慌ただしい中では思うに任せず，せめてもと，山の写真を紹介させて頂くことにしました。

出かけたのは，その前半が，Ｋ２峰に連なるバルトロ氷河源頭への５人でのトレッキング（29期OB深井様ご勤務のアルパインツアー社催行），その後は１人（むろん現地ガイドらと共に）で，フンザ地区の5000mの山を歩いたりなどして参りました。この稿では，本当は，ご覧頂くために地図などもとは思っていたのですが，つい時間が無くてそのままです。もし，ご興味の方がありますれば，深井様に連絡なされれば，トレッキング部分については美しいパンフレットを送って頂けます。短期間のコースもありますので，是非お出かけを。

実は，地球の歩き方･パキスタン編の広島三朗様と，小生が職を辞めたら，アフガニスタン国境に近いヒンドゥークシュ･ヒンドゥーラジ山中の多くの峠 ―玄奘三蔵や，大唐の高仙芝将軍など歴史上の故実の地― を結ぶ山歩きにご一緒にと言ってはいたものの，氏は２年前にバルトロ上部で遭難･ご逝去。しからば単独でと，現地の登山関係エージェントと連絡を取って見たものの，６月ではいくつかの峠は雪で越えられないとの由で，上述のような山歩きとなりました。

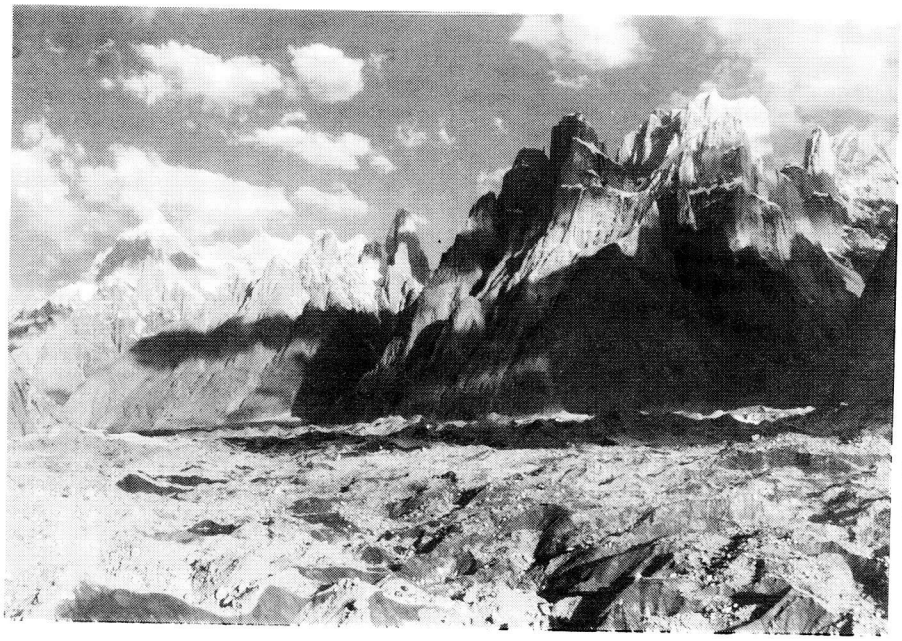
ここに紹介する写真は氷河の山々だけですが，夏のこと故，山中には様々の植物も。一方，山麓での人々の生活と山々の眺めも素晴らしいものでしたが，ここでは割愛しました。

バルトロ氷河の懐深くにて，8000mの山々に囲まれた中にいると，これまでの山の記憶も総てどこかに消えてしまうような壮大な眺めでした。静寂につつまれた眠りの中で，テントの下の凍りついた岩片を載せた氷の底から伝わってくる氷河の微かな震えに気づいて起き出せば，氷雪の稜線を背景に満天に総ての星は煌々と輝き，本当に物音一つない夜の静けさがありました。

人家のある辺りまで下山してくると，さすがに気候はなごみ，夕暮れともなれば巨樹のもとに佇んで，暮れなずむ氷河の山々が夕焼けに染まるさまなどの，涼しい風の気配。もう，酷寒と低酸素に悩まされることもない，満ち足りた眠りの安らかさのことなどが想い浮かびます。山麓でも，空が澄んでいると，夜ごとの人工衛星の光輝や流れ星の数々など，それが当たり前のことのように思えてきました。

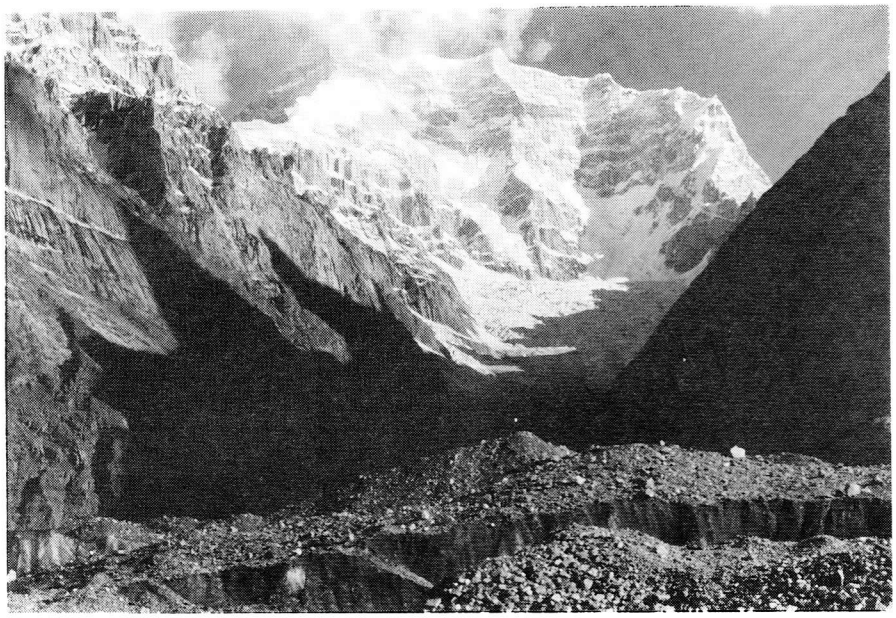
早いもので，それからもう１年。退職直後には，これでようやくに心のゆとりを得ることが出来ると浮き立つ心持ちで，今後は古今の書に親しみ，和洋の音楽を愉しみ，西域関係の探検史を学び，などと思ったのもつかの間。再就職して以来は毎朝６時20分出発の慌ただしい生活にて，列車中での読書時間だけは確実に増えたものの，この山歩きのアルバム整理も未だままならぬ状況です。

いつの日にか再びと思えど，今や，カラコルム山中での日々は夢まぼろしのようです。

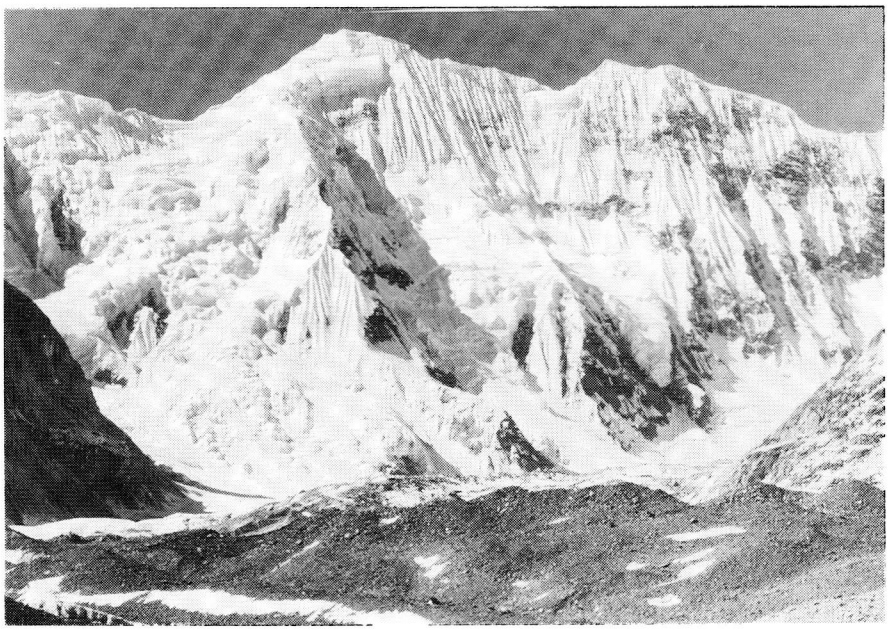


バルトロ氷河側壁に連なる山々

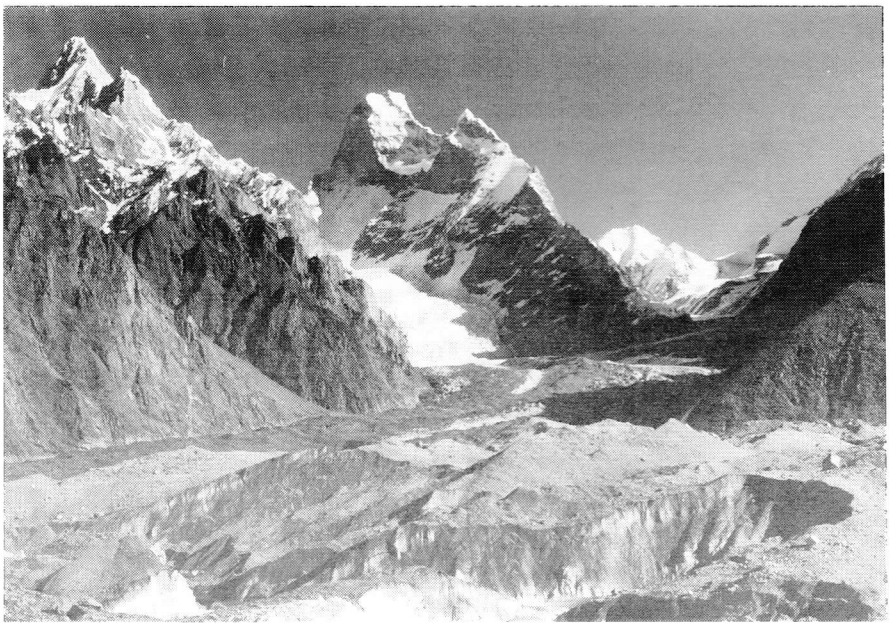
歩き始めて，ここまでで５日目。氷河はまだ序の口。氷河に磨かれた怪奇な岩峰が延々と続く。氷河の上はご覧のような岩屑の堆積で，起伏に富んだ広大な砂利山状。近くの岩峰までの比高は，2000～3000m。 山は，左より，パイユピーク(6610m)，トランゴタワー(6763m)など。



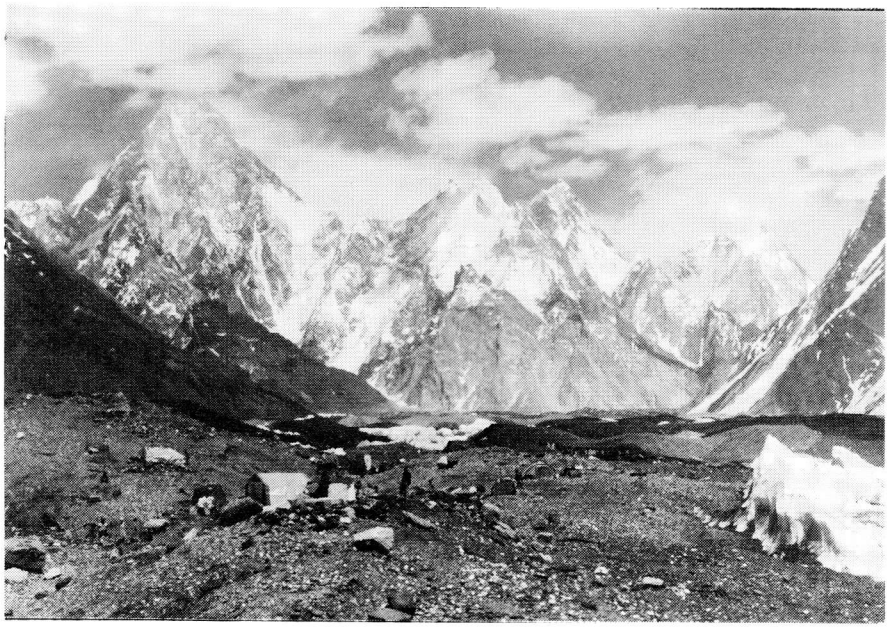
クルクスム（6600m）
巨大なバルトロ氷河本流には，左右から多くの支流氷河が合流している。その何れにも，源頭には美しい山々が覗いているが，7000～8000m級の山々が多い中では，あまり登山の対象とはならないようで，ほぼ無名。左もその１つ。



ビアルチェディ氷河源頭のピーク（6810m）
これも，上記同様のピークの１つ。懸垂氷河と氷河の雪襞が見事。



ムスターグタワー（7284m）
同じく，脇から合流する氷河の奥のピーク。

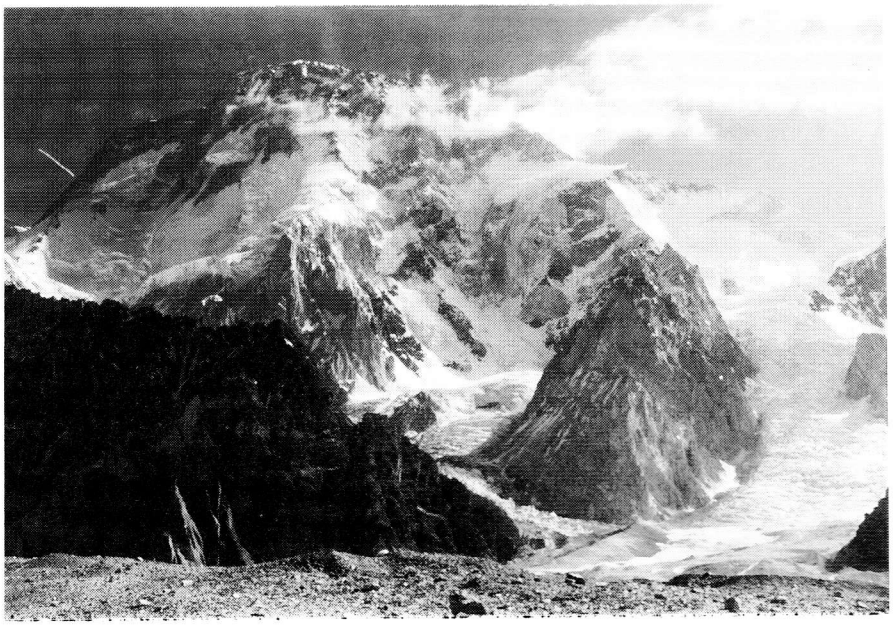


ガッシャーブルムⅣ峰（7980m）

山名は，現地バルティ語で「美しい山」の意との由。

トレッキングの半ばからずっと正面に見え続け，早朝の曙光から夕暮れの闇に沈むまで，終日の美しい眺め。

手前は，パキスタン陸軍の連絡キャンプ。トレッキングの間も，このピーク右奥のシアチェン氷河域では，インド軍との間での砲撃戦が続いていた。

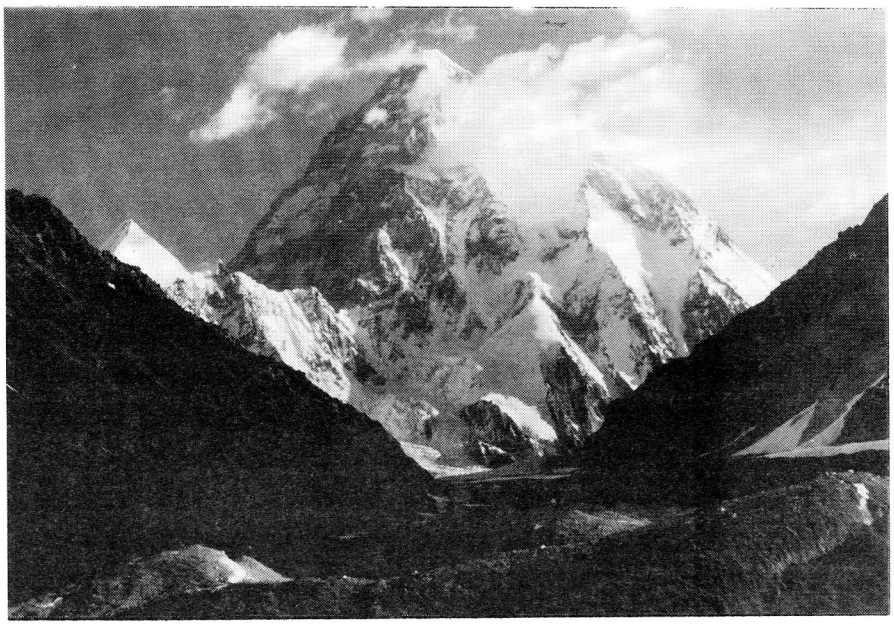


中央写真：**ブロードピーク**（8051m）

上の写真でのガッシャーブルム山脚がコンコルディア。その地に近づくとともに，このどっしりとした山が左方に見え始める。

下の写真：Ｋ２（8611m）

バルトロ氷河は，上部のコンコルディアで南北に分岐する。ここからしばらく進むと，ようやくにＫ２の全景が見え始める。左に小さく覗く純白の峰は，エンジェルピーク。



先に述べた広島様の永眠の地は，この左奥の氷河の中。最後の会話は，カザフのアルマトィ市からの電話にて，国境地域一帯のソ連邦製10万分１図等が入手可能なので先生の分もご一緒に･･･と。後日，その地図に対して，初めて詳しい地形が判ったのでいよいよこれからとのお礼が届いたのが最後となってしまいました。その地図も，きっと共に氷河の中に。

ここでは，山を中心に紹介させて頂きました。しかし，カラコルムの本当の美しさは，氷河の山々を背とした山懐の村での風光や村々を結ぶ峠に―パミールを想わせる草原の峠から，夏も氷雪の中の嶮しい峠まで。

広島様も登頂したＫ２を眺めつつ，氏とのそんな峠歩きの夢も，もう永遠に叶わぬ夢となってしまったな･･と，ぼんやりと考えていました。